

電子情報通信学会／NewsLetter 原稿
「世の趨勢に押し流されつつの＜浅慮近謀＞的提言」
-CPSY 研究専門委員会委員長就任の弁-

◇起

行政改革が声高に語られている。その考え方の機軸は、規制緩和の方向にあるらしい。学会活動においては、活動の活性化を妨げるほどの規制は組織の法人化などの場合を除いてはあまりないと思う。むしろ、他に対する遠慮とか、畏れから自主規制的に関係する技術領域に壁を設けたり、活動を制約するなどの＜縮み志向＞が生じることが多いようだ。

コンピュータをとりまく情報科学技術は、従来のいわゆる物理・化学のもたらす科学技術に比べて、その関係する領域は広く多面的である。経済・経営学、法学などの社会科学はもちろんのこと、文学、歴史学などの人文科学とも幅広い接点をもつ。そうした分野の学会では、情報科学技術への接近を目指した活動を積極的に展開している。

そこで最初の提言として、学会活動の縮み志向の打破をあげたい。科学技術領域を極小化し、到達点を深くすることは個人の研究においては重要である。学会活動として巨視的に科学技術を見るとき、自然科学からの社会科学、人文科学への接近姿勢もまた不可欠なことと思える。行政改革における文部省と科学技術庁の統合は、もしかして情報科学技術分野における時代の趨勢を追いかけているのかも知れない。

◇承

他領域との交わりに必要なことは、自己のアイデンティティの確保とそれへのこだわりである。これを２番目の提言としたい。異質な科学技術交流が一段高いレベルの価値を生むためには、個々がもつ独自性が発揮され、互いに融合されなくてはならない。これはなにも自然科学と社会科学などの高い次元の交流に限った話ではない。コンピュータ分野でいえばハードウェアとソフトウェア、ソフトウェアでもオペレーティングシステムとプログラミング言語など、異なる分野間での交流の重要性を否定する人はいないだろう。このとき、自己のアイデンティティがなければ、また、たとえあってもそれにこだわらなければ、異分野交流によって意味のある価値が生じることが期待できない。

アイデンティティへのこだわりは、技術内容のみならず、活動の態様においても独自性を発揮することが望まれる。他学会、他研究会にはない、あるいはそれらに先駆けた新たな活動の試みは重要である。その場合、すべてがうまくゆくことを期待しなくとも、とりあえずやってみる程度の軽さが必要なのかも知れない。

◇転

提言の3番目は、類似した学会活動の整理統合を目指した学会のリストラである。大きくいえば学術団体の国際的な整理統合から、個々の研究専門委員会内部の活動まで、いろいろな水準でのリストラが考えられる。ここでとりあえず取り上げたいのは、研究会水準のリストラである。現在活動中の各研究会はそれぞれの経緯のもとに誕生し、今日に至る歴史を背負っている。長い年月のうちには扱う分野が変質して、名称を変更するなどの対応をしてきた研究会もあるようだ。ここで一度そうした過去の歴史をも考慮した上での研究会リストラをやってみてはと考える。もちろん、関係の深い情報処理学会、日本ソフトウェア科学会など他学会の情勢を踏まえ、場合によってはそれらと協調する必要があるだろう。

最後にもう一つ、学会活動の仮想化への牽制球を投げておきたい。ネットワーク社会の到来で学会活動の在り方を考えることは大切である。ネットワークの利用によって、密度が高くかつ広汎な議論が可能である。研究会運営については、その恩恵は大きく欠くべからざる存在になっている。研究会活動の中心は、関係分野の人間が顔をつきあわせて行う研究発表である。この研究発表をネットワーク上ですませるという研究会の仮想化の考えを耳にする。日頃の切磋琢磨を専門家の目前で開示し、互いに研鑽しあうという、旧来からの研究発表様式の重要性は失せることはないと思う。

◇結

コンピュータシステム研究専門委員会の委員長就任の弁が、何やらきな臭い話となってしまった。これも日頃の行政改革の報道に影響された＜浅慮近謀＞のなせる業とお考えいただければ幸いである。研究会リストラについては、科学技術的な観点からの整理再編だけで話は終わらないこと、例えば、同好会的な人間関係の方がむしろ強いしがらみとして研究会活動のインセンティブをあたえている場合があることなどを承知の上で一石を投じてみた。